メタ言語機能の働く表現

林　　四　郎

メタ言語機能について

言語活動の成立に、

話し手	ADDRESSER
話し相手	ADDRESSEE
話	MESSAGE
話の内容世界	CONTEXT
接触	CONTACT
言語	CODE

という6要因を認め、これら各要因に対応させて、

情動機能	emotive function
指令機能	conative function
創造機能	poetic function
指示機能	referential function
接触機能	phatic function
メタ言語機能	metalingual function

という6種の言語機能を認めたのは、ロマン・ヤコブソンである。(この訳語の責任は私にある)

この6機能のうち、いちばんよく働くのは指示機能で、日常生活における情報のやりとりは、大方、この機能が中心になって実現している。反対に、いちばん働くことが少いのは、メタ言語機能である。

メタ言語機能とは、表現に使われる言語の語形や語性を意識の場に呼び出す機能である。一般に、言語表現において、言語は、意味や働きを伝える役目をするのがそのつとめであって、言語それ自身の形式を強く主張しはしない。すなわち、語形や語性が、当事者、特に聞き手の意識の場に呼び出されることは

多くないのである。

「雨が降っている。」

と言う場合、雨降りの事実が伝わればいいのであって、その時のことばが、単に

「雨だ。」

でも、「雨」という語を含まず、

「降っている。」

だけでも、何でもいいのである。言った方も、聞いた方も、今のことばがどういうものであったかを、あまり気にとめない。

ところが、もし、「あめが」の発音が「あめが」であったり、「あめが」であったりしたら、東京の人間なら、おやっと思い、「飴かな？雨かな？飴が降るのは変だから、雨だろうな。この人は関西の人かな」などと思う。このように語形と語意との関係づけにまぎらわしさが生じたりすると、始めて、語形を意識し、そこに「ことば」があることを思うのである。

このように、何かの状況から、表現の中の「ことば」を意識させることを、メタ言語機能という。それゆえ、普段のことばのやりとりでは、メタ言語機能は働かないのが正常で、働けば、むしろ異常というべきである。

メタ言語機能は、言い換えれば、注釈の機能である。表現の流れにストップをかけて、ある言葉に立ち止まり、通常は意識しない「ことば」について考えるのであるから、それは、言葉のある部分に注釈を加えることに外ならない。注釈ということばからは、だれしも、古典文や外国文の解釈を思う。確かに、訓詁注釈とは、メタ言語機能の発動に終始することである。

「メタ」とは「上位」ということである。注釈の作業では、注釈の対象になることばと、注釈に用いることばと、レベルの違う二つのことばが生きている。注釈の対象になることばを対象言語 (object language), 注釈に用いることばをメタ言語 (metalanguage) という。だから、ここで、メタ言語機能を別の言い方で説明すれば、普段はただ一種類の言語の流れしかないところに、突然、もう一種類、別の言語の流れが生じて、新しい方の言語が旧い方の言語を操る立場に立つようになることをいうのである。

中国の古典籍では、テキストに、大体、一定の形がある。本文と割り注とがその主な形で、時に、欄外注(これを鼇頭という)がつき、さらに傍注がつくこともある。この形においては、本文が対象言語で、割り注がメタ言語である。欄外注がある場合、これを、割り注の第一メタ言語に対する第二メタ言語と考

えてもよいし、本文と割り注とが合体して対象言語となったものに対してのメタ言語だと考えてもよい。それ以上に注の層がふえて行く場合にも、同じ関係が考えられる。伊藤東涯の『操觚字訣』に「虚語実語ノ弁」という一節があって、次のように記されている。

> 文章ノコトバニ、「虚語」「実語」アリ、「虚語」ハ人ノ口上ナリ、「実語」ハ事実ヲ直ニウツスコト也、コノ訳ヲシラザレバ、議論叙事、混雑シテワカレズ、タトヘバ、春秋ニ「春王正月、公即位」トアリ、コレ実語也、左伝ニ之ヲ伝シテ、「摂也」トアリコレ虚語ナリ、コノワケハ、春王正月、公即位ト云ハ、事実ヲ直ニ記録シタルモノ也、ソノワケヲ摂スレバナリト云ハ、口上ニテ、コレヲコトハリタルモノナリ。

これはおもしろい記述だ。ここでいう「虚語」は、中国語の単語を「実字」「虚字」「助字」と分ける時の「虚字」とは別で、むしろ、今いうメタ言語に当る。東涯が「口上」とか「コトハリタルモノ」と言ったのは意味が深い。このことには、あとで再び触れるであろう。

メタ言語機能すなわち注釈の機能は、古語や外国語のように、異なる言語体系による作品を扱う場合には、常時発動されるが、一般に、平常の状態で自国語の表現をしている時には、発動されないのが普通である。

しかし、これは、実は、通り一遍に表面をなでた言い方であって、仔細に点検すると、案外いろいろなところに、メタ言語機能の働く表現があることを発見する。そのいくつかについて考えを述べたい。

日常の言語表現に現れるメタ言語機能

一語とか、一句とか、一文とか、そういう言語要素の働きを解釈するに当って、メタ言語機能を考えないとよく理解できないことがある。その例を拾う。

1. 「すなわち」と訳される or

英語の接続詞 or には、「または」と訳される働きと、「すなわち」と訳される働きとがある。A or B の or が「または」なら、A と B とは互いに代り合う関係にあって、同一場面では両立しないことになる。Aが実現すれば、Bは実現せずが、Bが実現すれば、Aは実現しないという関係である。(この二者択一性が強調されると、either A or B の形になる。) しかし、「すなわち」の時はそうでない。A と B とが等価になる。と、このように言うと、or に、相反する二つの用法があるように聞えるが、事実は決してそうではない。or の

働きは、「または」の場合も「すなわち」の場合も同じで、ともに「または」なのである。ただ、前者の場合は、or で結ばれるAとBとが、言語の普通の用法に従って、「A」「B」なる言語形式ではなくて、それらの言及対象 (referent) であるのに対して、後者の場合は、A, B が言語形式「A」「B」だという違いがある。「A であるか、または、B であるか」が前者、「『A』と言うか、または、『B』と言うか」が後者である。前者では、言及対象が二者択一になるのに、後者では、同じ対象に言及するための言語形式が二者択一になる。AとBとは、言っている内容は同じだが言い方が違うということで、それが「すなわち」「つまり」「言い換えれば」「別の言葉でいえば」などの訳語となる。

「すなわち」の場合、「A」「B」が言語形式になるということは、AとBとが対象言語の側に回って、「or」がメタ言語になることを意味する。

> My uncle studies astronomy, or the science of stars.
>
> 私のおじは天文学、つまり星の学問を研究しています。(研究社『ユニオン英和辞典』の例文)

の例でいえば、astronomy と the science of stars とは、言葉が違うだけで、同じことがらを指している。astronomy と言って何の疑問の余地もないと話者が感じていたら、or 以下の表現は生れなかったはずである。発話の流れが astronomy まで来て、一瞬、「あ、この言葉で充分わかるかな?」と話者が思った結果が、同じものを指す別の言葉を捜すことになったわけである。その時まで対象事物を指すためにだけ使われて、自分自身は何の対象でもなかった言葉 astronomy が、この瞬間、観察と扱いの対象になり、or という言葉で扱われる立場に立った。その or が捜して来たもう一つの言葉が the science of stars である。

or に、「または」と「すなわち」と、二つの語義があるのではない。or が、表現の流れの中で、突然、メタ・レベルに立ち、他の特定の語をオブジェクト・レベルに追いやることがあるのだ。それから先の or の働きは、普段と何も変るものではない。この問題をこのように理解したい。

2. 「なぜなら」の2種

旧約聖書、士師記第14章に、「サムソンとデリラ」で有名なサムソンが妻をめとる経過が記してある。(この妻はデリラではない。名が記されていない)

第3節から第4節にかけて、King James の欽定訳 (1611年 Authorized

Version, 略称 AV) には、こうある。(以下、引用文の下線はすべて筆者による)

> And Samson said uto his father, Get her for me; *for* she pleaseth me well.
> But his father and his mother knew not that it was of the LORD, that he sought an occasion against the Philistines: *for* at that time the Philistines had dominion over Israel.

異邦人であるペリシテ人の娘をほしいと言うサムソンに、両親が同意しなかったことを書いている。2箇所に接続詞 for が使われている。ともに、「なぜなら」と訳してよかろうが、両者の間に、どこか働きのちがう所がある。前の for は単純に理由を示している。「気に入った娘なのだから、私に下さい」というので、至ってわかりやすい。

サムソンの両親は、サムソンのその行動が、ペリシテ人に打撃を与えようと機をねらう主(エホバ)の心から出たものだということを知らなかった。そのあとに for があり、さらにそのあとに「そのころ、ペリシテ人がイスラエルを支配していた。」とある。この for は、両親が息子の行動が主の心意によるものだと知らなかったことの理由を示しているだろうか。ペリシテ人がイスラエルを支配していなければ、両親に主の心意がわかっただろうに、現実はそうでなく、ペリシテ人がイスラエルを支配していたから、息子の言うことと主の心意との関係がわからなかった——という論理は、どう考えても成り立たない。

この for は、両親が息子と主との事情を知らなかったことの理由を引き出しているのではない。理由は理由でも、両親が知らなかったことの理由ではなくて、サムソンがペリシテ人の娘を妻にしようとすることがどうして主の心にかなうことなのかの理由なのである。サムソンをしてペリシテ人と戦わせるためには、サムソンがペリシテ人の娘を妻にしようとして、そこからいざこざが起ることが望ましかった、そこに主エホバの深謀遠慮があった——という意味での「理由」である。これは何の理由かというと、聖書の述べ手が両親の反対と主の心とを結びつけて、両親が反対したのは主の心を知らなかったためだというふうに述べたことの理由である。何何であることの理由ではなくて、何何であると述べたことの理由である。

前文の叙述内容に対して、その原因や理由を「なぜなら」と言って述べるのが普通の「なぜなら」であるのに対して、前文の叙述そのものを受けて、「なぜそう叙述したかといえば」という「なぜなら」は、メタ言語化した「なぜな

ら」である。このメタ言語化によって、前文中の一つ二つの語ではなくて前文の叙述全体が対象言語化される。

士師記の文章のこのくだりをこのように読んだが、この部分だけについていうと、実は、ほかの読み方もできる。それは、for 以下を、直前の句、he sought an occasion against the Philistines (主がペリシテ人に打撃を与えようと機をねらっていること)の理由とすることである。こう見れば、メタ言語問題は消えて、この for も、普通に、何何であることの理由を示すものとなる。それなら、わざわざメタ言語化を持ち出すことはないのだが、この文章を無心に何度も読むと、どうもこういう続き具合には受け取りにくいので、メタ言語化の解釈を出したのである。

ところが、この部分が、同じ英訳でも、1881年から1885年にかけて改訂され、1901年にさらに修正された Revised Version (RV と略称される)で見ると、3節のサムソンの言葉は同じだが、4節 But から先が次のように変っている。

> But his father and his mother knew not that it was of Jehovah; *for* he sought an occasion against the Philistines. Now at that Time the Philistines had rule over Israel.

一つ大きく違うことは、for の位置が前へ移動して、両親が息子の行動をエホバの心にかなうものと知らなかったという叙述の直後に来たことである。これだと、もはや二つの解釈はできない。エホバがペリシテ人に打撃を与える機をねらっていたことが両親の無知の理由になるとは考えられないから、ここではどうしても for のメタ言語化を考えなければならない。それによって、「父も母も、それがエホバの心によるものとは知らなかったのだ。——いや、どうして、このように、父母の反対とエホバの心とを関係づけた言い方をするのかというと、それは、エホバがかねてからペリシテ人に打撃を与えるきっかけを求めておられたからなのだ。」という叙述の流れが自然に出来上がる。

for を入れる位置に AV 版と RV 版とにこのような違いがあるのは、ヘブル語原典の読み方に問題があるからであろうが、私はヘブル語を知らないから、その点に触れることはできない。教示を得たいものである。

RV 版のこの解釈は、その後一層読みやすくなった1952年刊アメリカ聖書協会での再改訂版 (Rivised Standard Version, 略称 RSV) でも次のように受けつがれている。

> But Samson said to his father, "Get her for me; *for* she pleases me well."
>
> His father and mother did not know that it was from the Lord; *for* he was seeking an occasion against the Philistines. At that time the Philistines had dominion over Israel.

for や because の訳語として、「なぜなら」や「どうしてかというと」のほかに、私たちが「というのは」という言葉を用意していることに気付く。この「というのは」は「そう言うわけは」であって、そこにメタ言語化の表示があるわけである。「何となれば」という訳語も、よく用いた記憶があるが、これは普通の用法とメタ言語用法とが兼ねられるように案出された、なかなか巧妙な訳語であるように思う。

ことのついでに、その後の諸英訳がこの部分をどう訳しているか、いくつか、目に触れたものを紹介しておこう。

1961年に完結したアメリカの New World Translation (これは、Watchtower Bible and Tract Society という団体の刊行で、Hebrew-Aramaic Scripture の訳とある)の訳文は次のとおりである。

> Still Samson said to his father: "Get just her for me, *because* she is the one just right in my eyes."
>
> As for his father and his mother, they did not know that that was from Jehovah, that he was looking for an opportunity against the philistines, *as* at that particular time the Philistines were ruling over Israel.

AV 訳の位置の第一の for が because になり、第二の for は as に変っている。これが as になっていることは、以下の文を直前の、エホバがペリシテ人攻撃の機をねらっていることの理由と断じたものであろうから、ここでは、メタ言語化の解釈は無いわけである。

1970年にアメリカ・カトリック聖書協会 (Catholc Biblical Association of America) から出た The New American Bible では、AV 訳の流れを汲むように見え、極めておだやかにわかりやすく、

> But Samson answered his father, "Get her for me, *for* she pleases me." Now his father and mother did not know that this had been brought about by the LORD, who was providing an opportunity against the Philistines; *for* at that time they had dominion over Israel.

としている。後の for の位置は AV 訳と同じだが、この文では、for のメタ言語化が明らかであろう。

戦後の英訳中の名訳と定評のある New English Bible も、1970年に完成した。その訳はこうである。

> But Samson said to his father, 'Get her for me, *because* she pleases me.' His father and mother did not know that the LORD was at work in this, seeking an opportunity against the Philistines, who at that time were masters of Israel.

後の部分では、問題のところは現在分詞 seeking と関係代名詞 who とで述べられており、for も because も無い。理由づける言い方でなく、事実を直叙する言い方になっているわけで、なるほど、これは明晰である。

英訳聖書引用の最後に、1972年完成の The Living Bible (The Billy Graham Evangelistic Association) の章句をかかげる。

> But Samson told his father, "She is the one I want. Get her for me."
> His father and mother didn't realize that the Lord was behind the request, *for* God was setting a trap for the Philistines, who at that time were the rulers of Israel.

ここでは、サムソンの言葉の中に for が無い。2文の位置を入れ替えて、理由の方を先に出し、「あの人が欲しいんだ。あの人を私に下さい。」と、ぶつけるように並べたから、理由を示す for が要らなくなってしまったのである。この訳は "paraphrased" と大きくうたっているだけあって、なかなか勇敢な訳し方である。後の方では、RV 以来の解釈を取って、for の位置を前へ移動し、メタ言語化を確定している。

聖書の引例が長くなったが、これによって、メタ言語化する理由づけの言い方があることは、明らかになったであろう。

理由づけに、言及対象たる事実への理由づけと、言及した自分の態度への理由づけとの別があることは、このようにいくつも例文を引いて長々論じるまでもなく、恐らく、だれにでも気付かれていることだろう。

例えば、ある人(Aさん)が、昨夜よく眠れなかったということと、今朝冴えない顔色をしているということとがあるとする。これらを、ことがらに即して、原因または理由とその結果という関係で結びつけた表現にするならば、それは、

眠れなかったことが原因で、顔色のさえないことが結果の事実であるに決まっている。それを言葉にすれば、

Aさんは、昨夜よく眠れなかったので、今朝はさえない顔色をしている。

となるか、

Aさんは、今朝はさえない顔色をしている。なぜなら、昨夜よく眠れなかったからだ。

となるか、大体、そんなところだろう。

これを、関係を逆にして、顔色のさえないことを原因または理由とし、よく眠れなかったことの方を結果として表現したら、どうなるか。

Aさんは、今朝はさえない顔色をしているので(から)、昨夜よく眠れなかった。

は変だし、

Aさんは、昨夜よく眠れなかった。なぜなら、今朝はさえない顔色をしているから。

もおかしい。しかし、これらの言い方は、昨夜眠れなかったことを、断定する事実でなく、「きっと...だろう」という推測の中身だと考えると、ぴったりして来る。すなわち、

Aさんは、今朝はさえない顔色をしているから、きっと昨夜よく眠れなかったのだろう。

Aさんは、昨夜よく眠れなかったのにちがいない。なぜなら、今朝はさえない顔色をしているから。

のようになる。これらの例で、接続助詞「から」や、接続詞「なぜなら」は、言及対象のことがらの理由づけではなく、「きっと...だろう / にちがいない」と推測して物を言ったことの理由づけをしていることが明らかである。

英語の for や because の場合と全く同じに、日本語の「なぜなら」や「から」も、「何何である」ことの理由づけをするほかに、自分の物言いを取り立てて、「何何であると言う」ことの理由づけをするのにも使う、すなわち、メタ言語化の用法があるということを確認しておこう。

全く同じ次第で、「なぜ?」「どうして?」という問いかけにも、「なぜ / どうして、そうであるのか?」という通常の問いと、「なぜ / どうして、そう言うのか?」というメタ言語化した問いとがあることが区別できる。

「昨夜はよく眠れなかったんじゃないのかい?」という問いに、「どうして?」と問い返したら、それは、「どうしてそういうことを聞くのか?」という意味に

なる。同じ問いに「その通り。よく眠れなかったよ。」という答えがあって、それに重ねて「どうして?」と聞けば、これは「どうして眠れなかったのか」と、事情をたずねることになる。前者の反問はメタ言語化した問いであり、後者の問いは通常の問いである。

「なぜ」といえば、やはり英語の why に、「なぜ」のほか、「そりゃあ!」と訳すとよい場合があると聞いて、昔、中学1年のとき、ふしぎに思ったことがあるが、これも、「なぜ」のほかに「そりゃあ」があるのではない。「なぜ」の問い先が、言及対象の事実でなくて、発話態度の形式に向かう場合、「なぜそんなことを聞くのか?」から「そんなことは聞くまでもない」になり、「そりゃあ、決まっているさ!」「そりゃあ!」となるわけで、これも why のメタ言語化用法である。

3. 「いい」「文字通り」「りっぱ」

「いい」というのは、実に用法の広い言葉であるが、メタ言語用法にも及ぶことがある。「...もいいところ」という言い方がある。例えば「親馬鹿もいいところ」といえば、「親馬鹿で、親馬鹿で、どうしようもない」状態を指す。この「いい」は、「悪い」の反対語になる「良い」とは大分趣きがちがう。親馬鹿にも「良い親馬鹿」と「悪い親馬鹿」とがあるというようなことではない。「親馬鹿」という言葉が充分すぎるほど当てはまる状態、りっぱに親馬鹿といえる状態、押しも押されもせぬ親馬鹿、といったようなことである。「...もいいところ」という言葉の働きは、「も」の前にある「...」の部分を言葉として意識正面に据え、「...という言葉がぴったり当てはまる何か」ということで、「文字通り」というのに近いように思う。この「文字通り」の「文字」は、現在の私たちが考える書き文字に限られたことではなく、文字も含みながら「言葉」全体を意味するようだ。古い中国で「字」は名前であり、言葉であった。「文字通り」とは「言葉通り」で、字に書いた形の通りという意味ではない。すなわち、「文字通り」は、「その言葉がぴったり当てはまる」である。

「文字通り」にしろ「...もいいところ」にしろ、今用いている言葉を言葉として意識させる言い方であるから、メタ言語化をたてまえとすることばだと言える。

「いい」には、とかくこのような働きがあるようだ。「いい若い者が昼間からごろごろしているとは、だらしがない」だの、「いい大人がついていて、それ

では困るではないか」だのという時の「いい」も、「悪い」の反対語ではない。「正真正銘の」「...ではないと言って逃げることは絶対にできない」のように言い換えられるひびきをもち、やはり、「...という言葉がよく当る」ということである。

「いい迷惑」「いい恥さらし」「いい面の皮」「いい年して」などの「いい」にも、共通して、「...の言葉がよく表わす」という意味があるように思う。

この「いい」に非常に近い言葉に「りっぱ」というのがある。「りっぱな家」で二つのことを意味しうる。一つは「デラックスな家」で、「彼はりっぱな家に住んでいる」といえば、こちらの意味であるが、「これなら『小屋』ではなくて、りっぱな『家』だ」のようにいう時は、「デラックスな家」という意味ではない。「『家』という言葉で言ってすこしもおかしくない」という意味である。「りっぱ」は、一般には「デラックス」の意味に使われることが多いが、時に、「十分...といえる」の意味で使われる。これは、「いい」の場合と同じく、メタ言語化の用法というべきである。「りっぱに成人した。」とか「彼女は女手一つでりっぱに子供を育て上げた。」のように、「りっぱに」と副詞で使う場合は、むしろメタ言語化用法の方が普通であろう。「デラックスな状態に」という意味で使われることは多くないように感じられる。

このような「いい」や「りっぱ」が、もっと度を越すと、「...なんてもんじゃない」「...どころではない」などの言い方になる。「あれは、もう、親馬鹿なんてもんじゃないよ。」といえば、親馬鹿の度が救いがたくひどくて「親馬鹿」という言葉ではもう表わしきれないことを言う。親馬鹿であることを否定しているのではなく、反対に、大肯定しているのである。

「どころではない」という言い方は、正反対な二つの用法をもっている。「親馬鹿どころではない」が、「あの人は、噂では、大分親馬鹿だと聞いていたけど、近くでやり方を見ていると、なかなか以て親馬鹿どころではない、随分子供にきびしい人だ。」というようなのが一つの用法。もう一つは、「あの人の親馬鹿ぶりは、噂では聞いていたけれど、近くで見ると、いやはや、親馬鹿どころではない、もう、子供のことでは何も分らなくなると言った方がよい。」のような用法である。つまり、「Aどころではない」で、Aを否定する場合と、Aを強く肯定する場合とがあるわけである。

「Aどころではない」でAを否定する場合は、「Aどころか、Aではない」で、普通の流れであるが、Aを強く肯定する場合は、「Aどころか、『A』という言葉では、もはや、表しきれない、ウルトラAだ」ということである。後者

は、「なんてもんじゃない」と同じ言い方になり、ともにAの内容ではなくて、言語記号「A」を対象の位置に回す言い方であり、メタ言語化用法と見るべきである。

4. 「いわゆる」とかぎ括弧

「いわゆる」はよく使われる言葉である。「所謂」と書き、「世に言うところの」「一般に言われている」の意味である。世間での通り名ということで、これが言葉を意識させる用語であることは、言うまでもなかろう。今までの例とは違って、メタ言語化を専門とする言葉であり、説明を要しない。

現代の文章は、以前の文章から見ると、括弧の類を、

「　」、『　』、（　）、〔　〕、〈　〉、“　”、‘　’

など、多様に使うようになった。これらのうち、「　」と『　』とは、言葉の引用に用いられることが多い。横書きの文章では、欧文流に“　”や‘　’も使われる。(近ごろは、縦書きの文章にまで、“　”、‘　’が進出して来た)

文章中に人語を引用するには、一般に、小説の場合のように、会話の言葉を示す場合と、何かの必要で語句の断片を引いて掲げる場合がある。

小説は、会話の引用をほとんど必須の要素とするから、言葉の引用があっても、そこに注釈の機能は感じられない。事物の有様も、人の言葉も、小説では、共に描写の対象であるから、文章中に人語が出現したからといって、筆者の方でも、読者の方でも、そこに、言葉への注意喚起も、立ち止まりもないのである。

次の文章は、随筆の文章である。

> 雨は人を慰む、人の心を医(い)す、人の気を和平(なごやか)ならしむ。真に人を哀(かなし)ましむるものは、雨にあらずして風なり。
> 飄然として何処よりともなく来り、飄然としてて何処へともなく去る。初なく、終を知らず、蕭々として過ぐれば、人の腸(はらわた)を断つ。風は、過ぎ行く人生の声なり。何処より来りて何処に去るを知らぬ「人(ひと)」は、此声を聞いて悲む。(徳富蘆花『自然と人生』より)

「人」という言葉が6回使われており、6回目は、カギの中に入っている。この6回目の「人」も、

「人」は名詞である。

などの場合とは違って、「人」という言葉について言っているのではなく、人間なる存在について言っている。その点では、前5回の「人」と、何も違って

はいない。それにもかかわらず、言葉の用い方に、前5回と違うものがあることは確かである。朗読する時も、心持ち、ここに音調上の卓立を置くことになるだろう。ここには、やはり、「人」という言葉への注意喚起がある。「『人』という言葉で指し示される存在である人間――それは、何処より来りて何処に去るを知らぬものである。その人間は、自分と同じく何処より来り、何処へ去るとも知れぬ風の声を聞くと、無性に悲しくなるのだ」と言っている。

> 植物が生物である事はだれでも知っている。しかしそれが「いきもの」である事は通例だれでも忘れている。(寺田寅彦『春六題』より)

「生物」と「いきもの」とは、同意語ではないまでも、極めて近い意味をもった言葉であり、普通は、取り換えて用いても、大した支障は起らない。しかし、この文章では、「いきもの」に「生物」とは違うなまなましい意味をこめて用いているので、特に、注意喚起のため、カギで括って用いている。強調といえばそれまでであるが、単に声を大にしているだけのことではない。通常の意味で「生物」という語を用いた、その直後に、それと非常に意味が近いけれども確かに違う言葉を用い、そこに注意を向けさせ、どこに違いがあるかを考えさせるために、カギを用いている。

引例した二つの文章において、それぞれ「人間」「いきもの」なる言葉に用いられていたカギ括弧は、いずれも、立ち止まってその言葉への注意を要求する働きをもっている。すなわち、注釈の機能を発揮する用法である。このようなカギ括弧の用法は、珍しいものでも何でもない、日常の文章に絶えず出現しているものである。

5. 「今の」「例の」

話しことばの中によく出て来る言い方で、次のようなのがある。

> 幸に今の事務取締役技術部長である所の大川平三氏、此の人が未だ若年でありましたが、明治十二年八九月の頃でありました、亜米利加へ修業の為に派出すると云ふことに差定めて...。大川氏が帰朝されたのが、明治十四年でありしが、...。さうして今の大川氏が亜米利加から帰りました頃ほひには、頓に地券紙の製造は已んで、普通印刷紙の供用を専らにせねばならぬ時期に相成つた。(『渋沢男爵実業講演』大正2年、帝国図書出版刊の中の「機械工業の嚆矢王子製紙会社」から)

この引用の中に、「今の」という言葉が2度用いられているが、「今」の用法が違っている。前の「今」は、言葉通り、「今現在」であり、この語が用いら

れているといないとでは大川氏がいつの技術部長かという点で事実問題に大きな差異を生ずるが、後の「今」は、あっても無くても、話の内容に何も変化はない。後の「今」も、「今現在」であることには違いないのだが、その「今」が後続文脈中のどの語をも規定せず、「今申した」ということで、話している自分の言語活動を規定するにとどまっている。

前者の「今の」は、言葉の指し示す内容を規定しているが、後者の「今の」は、話の内容にはかかわらず、話者の表現活動そのものに注意を向けさせる。これは、話の中の特定の言葉を対象言語に回す、これまでの例とはやや違って、自分の言語活動そのものを対象言語(言うならば、「対象言語活動」)に回していると見るべきであろう。

源氏物語に、よく「例の」という言葉が出て来る。例えば、夕顔の巻に、

> 惟光に「この西なる方には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」とのたまへば、例のうるさき御心とは思へど、さはまうさで...(国文大観による)

とある。これは、ことば通り、「いつもの通りの」と訳せば当るであろう。源氏が「六条わたりの御しのびありき」をして、五条の知人の家に行き、隣家、すなわち、夕顔の住む家にむかって、しきりに興味を発するところである。家来の惟光に隣家の様子を調べさせようとして何か言うのを、惟光が聞いて、「また、旦那様の女好きの虫が!」と思うところである。

人の情報で、隣家が「やうめいの介(揚明介)」なる者の家で、男は田舎に行っていて、居らず、若い女が残っているのだということがわかる。その女の姉妹は宮仕えをしていて、よくこの家に来ているということを聞き、源氏は、さきに、夕顔の花に歌をそえてよこした人物を思った。

> 「さらばその宮仕へ人なゝり。したり顔に物なれていへるかな」と、めざましかるべききはにやあらむと覚せど、さして聞えかゝれる心の憎からずすぐしがたきぞ、例のこのかたには重からぬ御心なめりかし。

この文章での「例の」以下は、いわゆる草子地の文で、作者が源氏の浮気心を評して言っていることである。「例の」は、前の例と同じく「いつもの通りの」と受け取っていいが、草子地の文であるだけに、「いつもそうである通りの」であるよりも、「いつも申している通りの」である方が、ぴったりする。作者が自分の物言いを持ち出して、それに向って「例の」と言っている気持の方が強いようだ。

さらに、話が進み、惟光の計らいで、源氏は、夕顔の家へ通うようになる。

その最初のところを、作者は次のように述べている。

> 惟光、いさゝかの事も御心に違はじと思ふに、おのれも隈なきすき心にて、いみじくたばかり惑ひ歩きつゝ、忍びておはしまさせそめてけり。この程の事くだくだしければ、例のもらしつ。

すなわち、初回の折りのことは、それが惟光の努力によるものであるとだけを述べて、その状況を描写することは避けたのである。この「例の、もらしつ」は、まぎれもなく、筆者の述べ方について、断りとして言っていることであるから、「いつも、私がそうしておりますように、この時のことも、書いても、うるさいだけですから、書きもらしました。」と言っているわけである。「例の」は、自分の表現活動についての「例の」である。

夕顔の巻の、近い文脈の中から、三つの「例の」を拾ったが、第一は、言及対象についての「いつもの通り」、第三は、自分の表現活動についての「いつもの通り」であることが明らかである。第二の例は、どちらとも取れるが、私は、第三例の方に近いものと見たい。「例の」に、対象世界の中で言っている通常用法のものと、対象世界から抜け出して、自分の言語活動を対象界に回した注釈機能的なものとがあることを見た。

6. 紙面文脈の対象化

文章は紙の上に書かれるから、文章の文脈は、物理的には、紙面という物質に帰する。私たちが履歴書を書く時に、最後に、「右の通り相違ありません」と書くのは、縦書きにした場合のことである。横書きならば、「上記の通り・・・」と書く。話しことばならば、「右」も「上」も問題にならないが、紙面空間であれば、既成文脈は、縦書きなら右、横書きなら上に作られる。

「右」か「上記」かが分れなければならないのは、表現者の言語活動を、自ら取り立てて観察するからであり、それは、メタ言語化の現れである。

同じく「右」や「上」でも、「スイッチを右にひねると、点火します」だの「相対性原理で、ニュートンの時代と物の見方がすっかり変っても、りんごは、やはり、上から下に落ちる。」だのと言う場合は、その「右」「上」が、普通に、表現内容の世界で言われているから、表現活動の形式が話しことばによるか、書きことばによるかとか、縦書きになっているか、横書きになっているか、とかいうことは、問題にならない。表現者の表現形式を問題にしなければならないのは、表現活動がメタレベルで行われ、自分の作った既成文脈を対象の側に

回している証拠である。

図や絵や写真や表は、紙の上で文章と共存する性質のものであるから、文章紙面にそれらが現れる時は、それらを指し示す「図」「絵」「写真」「表」などの言葉は、必然、メタ言語化して使われることになる。

マッチの軸を図のように並べなさい。

という時は、そこに図がかいてある時であり、読者は、表現者の言語活動を、目の前の紙面に見るのである。これに反し、

両親と子供との関係を図に示しなさい。

とある時は、そこに紙面という文脈を見る必要はない。読者は、「図」という言葉を受け取って、図の概念を頭に描けばよい。これが通常の言語理解活動である。

現代の出版文化から写真を除いて考えることは不可能である。

という文における「写真」と、大平首相の顔写真の載っている新聞記事に、

写真は大平首相。

とある場合の「写真」との違いも、同じことである。

7. メタ言語機能を発動する話し方

紙に書かれる書きことば表現活動において、紙面に注意を向けさせるメタ言語機能が発動されることがあるのと同様のことが、話しことばでの表現活動でも、発生する。と言うと、何か珍しいことをでも言うようだが、それは、実に何でもない、日常茶飯のことなのである。

話を始める時に、

私は、まことに話の下手な人間で、これから申すことも、みなさんには、さぞかしおもしろくないことと思います。

などと言って、自分の話し方の弁解的な予告をしたり、

これから地震についてお話を致しますが、前半と後半とに分け、前半では、これまでの大地震の実例について、後半では、地震の予測法について申し上げます。

のように、話の進め方の予告をしたりする。これらは、いずれも、話の出発点において、これからの表現活動を、前以て取り立て、対象化しているのであり、言語活動のメタ言語化である。

こういうことは、もちろん、話の初めにだけ起るわけではない。話の途中で、「ここからが本論です」とか、「いささか脱線した話になりますが」のように、

進度についての注釈を挿入したり、最後に「以上で、私の話を終ります。」と言うのも、同様に、話し方についての注釈を表現したものであり、メタ言語的発言に外ならない。

本稿の初めに、伊藤東涯の『操觚字訣』を引き、そこで「口上」とか「コトハリタルモノ」と言われた「虚語」の用法に注目した。話の中に、話し方についての注釈が入るのは、まさしく「口上」であり、「コトハリタル」言語活動に当るであろう。

8. 見立て条件の言い方

仮定条件の設定にも、いろいろな設定のしかたがある。

あした、雨が降れば、遠足はやめよう。

というのは、いちばん単純な筋の仮定で、降る可能性もあり、降らない可能性もあるところで、降った場合を仮定している。

時が経てば、忘れるさ。

という時、今は、まだ時が経っていないと認識しており、ある程度時が経った将来のことを仮定しているから、「仮定」には違いないが、今までの経験から言って、時は必ず経つにきまっている。時が経たない可能性は無いことを承知の上で、「時が経てば」と言っているので、これは、「必ず経つことになっている時がその通り経ったときには」という意味である。このような条件設定のしかたを、私は、以前、「述定条件」と呼んだことがある。(『基本文型の研究』昭和35年)「述定」は、ほかの意味にも使われることばだから、いい呼び方ではなかったと思うが、代る言い方も考えつかないので、そのままにしておく。

また、仮定には、そうなる可能性があるかないかは問題にせず、初めから架空のこととして、一つの状況を設定するような「仮定」がある。

もし、奈良の大仏が立って、東海道を旅したら、五十三次を何日で歩くか?

のような場合である。こういう種類の仮定を、同じ所で、私は「想定条件」と呼んだ。

仮定条件
述定条件
想定条件

と、三つ、広義の仮定条件を分けてみたほかに、同書では、もうひとつ、「見立て条件」というものを立ててみた。それは、

掲示板の前では、「あった、あった」と躍び上って喜ぶ人もあれば、ぼう

然として声もなく立ちつくす人もある。

だの

大阪が水の都なら、東京は煙の都だ。

のようなものである。

これらは、事実に対して、いろいろな状況を仮定しているのではない。事実は、眼前に展開しているただ一つの事実しかないので、それがもしこうだったらとか、ああだったらとか、仮定も想定も、してみる余地は無いのである。問題は、すべて、表現のしかたに関することであって、ある一つの事態を、Aと言い表すか、Bと言い表すかの分れがあるに過ぎない。

これを「見立て条件」というのは、事実問題でなく、事実をどう見立てて、どう言い表すかという、表現者の側の認識上の選びにかかる条件設定であることを言い表したつもりである。

この「見立て条件」は、本稿の立場で見ると、まさしく、これも、メタ言語機能が発揮されている表現に外ならない。

「大阪は水の都だ」という表現が成り立つなら、「東京は煙の都だ」という表現も成り立つ——ということであるし、掲示板の前で「躍び上って喜ぶ人がある」としてその事態を描き出すのが適切なら、その反面、「声なく立ちつくす人がある」と言って同じ場面を描き出すことも適切である——ということで、表現上のバランスを考えることによって、Aの言い方に対立するBの言い方が出て来るわけである。

見立てて物を言うことは、すなわち、表現を対象化することであるから、これも、メタ言語化を含む表現の一種だということができよう。

む す び

体系もなく、思いつき次第に物を言って来たが、メタ言語機能の働く表現について、当面、気になっていることは、一応述べ終った。

この同一線上で、言えることが実は、まだあると感じているが、これから先は、考えが甚だおぼろげになるので、もう一段考えて、言えるようだったら、また、稿を継ぎたいと思っている。

ここに記したことを、53年9月のある日、大学院博士課程の「言語行動論」で述べた。その折り、受講者の坪本篤朗、John B. Whitman 両君から、これに関連するものとして、次の論文を示された。

Ali Abdulla Farsi: Further Varieties of Adverbs in English (*Towards Tomorrow's Linguistics* ed. R. W. Shuy and etal., Georgetown Univ. Press, 1974 所収)

この論文では、英語の副詞を

Type I　Subject Adverbs
Type II　Direct Object Adverbs
Type III　Indirect Object Adverbs
Type IV　Partitive Adverbs
Type V　Reduced Predicate Adverbs
Type VI　Analogical Adverbs
Type VII　Metalinguistic Adverbs

と七つの型に分けている。そのいちいちを紹介するいとまは無いが、7番目の Metalinguistic Adverbs とは、

It is a pity that old man is so malodorous, *literally* and *physically*.

における下線の語のようなもので、literally は間違いなく「文字通り」であるし、physically は「正真正銘」とか「そのものずばりで」とかいうような意味であろう。これらの副詞は、どちらも malodorous (くさい) という言葉を用いたことについて言っているので、「メタ言語副詞」と名づけられた。これらは、本稿の3番目の類にそのまま当る。メタ言語機能の働く表現について、既に先学の指摘があったわけである。両君の教示に感謝する。